



横浜港近景。象の鼻防波堤が開港当初の姿を伝えている (撮影／米山淳一)

生糸貿易の始まりと横浜

横浜開港資料館館長
西川武臣

安政5(1858)年、日本はアメリカ・オランダ・ロシア・イギリス・フランスと通商条約を結び、翌年6月2日に、横浜は通商条約に基づき開港した。これ以後、横浜は日本を代表する貿易都市として発展を続けた。貿易の本格的な開始は生糸の輸出から始まり、日本は生糸輸出によって得られた外貨によって近代化を推し進めることになった。生糸の輸出が急増したのは開港した年の8月からで、慶応3(1867)年には全輸出品価額の約50%を生糸が占めるに至った。生糸を輸出したのは売込商と呼ばれた貿易商で、彼らは群馬県・福島県・山梨県・長野県などの生糸生産地から生糸を集荷し、横浜に移住した外国商人に販売した。

たとえば、開港当初に上野国吾妻郡中居村(現在の群馬県嬬恋村)から横浜に移住した売込商の中居屋重兵衛に関する古記録によれば、彼は開港直後の6月19日に本町通りに店を開き、現在、シルク博物館が建っている地点に店を持っていたイギリス系商社のジャーディン・マセソン商会に生糸を販売したことが分かっている。その量は7月下旬までで、この年に横浜から輸出された生糸の約4%に達し、こうした売込商によって大量の生糸輸出がおこなわれたことが分かる。もっとも売込商の盛衰は激しく、最終的に明治10年代以降は、野沢屋・亀屋(後に原三溪が経営した店)・渋沢商店(渋沢栄一の従兄が経営した店)・小野商店・若尾商店の5つの店が生糸貿易を独占するようになった。

ところで、開港直後に本町通り(現在、横浜市開港記念会館が建っている地点)に店を開いていた石川屋を描いた絵が残されている。絵を描いたのは横浜浮世絵の代表的な作者と

して知られた五雲亭貞秀で、この人物は写実的な浮世絵を多く描いた人物であった。店の奥に積まれているのが生糸であり、右手には生糸を買いに来た2人の外国商人が描かれている。当時、外国商人は売込商の店を訪れ、生糸の品質を調べた後に仮契約を結んだから絵はそうした様子を描いたと思われる。その後、外国商人は仮契約を結んだ生糸の一部分(見本の生糸)を自分の店に持って帰り、1週間から10日後くらいに外国商人の店で本契約が結ばれた。その際、見本の生糸と同品質の生糸が外国商人の店に運ばれ、再度、生糸の品質検査がおこなわれた後に、すべての生糸が外国商人の倉庫に収納された。当時、生糸の大部分はイギリスを経由してフランスの絹織物業地帯に送られたから、この絵に描かれた生糸もヨーロッパに運ばれたと思われる。



石川屋の店頭(五雲亭貞秀画、横浜開港資料館蔵)

『シルク』をめぐる川越・前橋・八王子・横浜の取組み

新年を迎え皆様におかれましては、お元気でお過ごしのことと存じます。思いを新たに歴史的資産の保全に向けて頑張っ
て参ります。本年もよろしくお願い申し上げます。

今号の特集は絹文化です。開港以来、横浜の繁栄を支えた絹産業は、生糸や蚕種、絹織物等産地との連携の成果です。その産地は、全国に及びます。今回は、その産地と連携した絹物語を集めてみました。あらためて敬意を表します。

(公益社団法人横浜歴史資産調査会 常務理事 米山淳一)

「川越・前橋・横浜絹のものがたりフォーラム」開催

藤井美登利 (NPO川越きもの散歩)

川越市市制100周年を記念した市民提案事業として、約180年前に川越藩士として生まれ「生糸の元勲」と呼ばれた速水堅曹という人物を再発見するフォーラムを企画しました。速水は、川越・前橋・横浜の3都市をつなぐキーパーソンでもあり、日本で初めての器械製糸所の開設に関わりました。

◆前橋と横浜で生糸に関わる

速水の生糸ビジネスのスタートは、横浜での藩営生糸問屋の開店です。英一番館(ジャーディン・マセソン)が一番大きな取引相手でした。英一番館からは器械製糸所の共同経営をもちかけられますが、出資金が高額のため実現しませんでした。その後、藩はスイス人技師を前橋に招き、速水自身が器械製糸の技術をマスターし、明治3(1870)年、藩営前橋製糸所を開設します。これが日本で初めての洋式器械製糸所です。官営富岡製糸場設立の2年前のことでした。前橋には記念碑が残されています。また、この製糸所の責任者であった藩幹部の深澤雄象は、函館から布教に来た司祭ニコライから洗礼を受け、深澤が設立した製糸所では女工が讃美歌を歌いました。かつての深澤屋敷の跡地内に今でも前橋ハリストス正教会が残っています。

今回のフォーラムのパネリストのひとり、英国人のシーラクリフさん(十文字学園女子大学名誉教授)は、幕末に日本に駐在したオールコック、パークス、サトウ等英国大使館関係者の日記を読み解いています。彼らが前橋まで生糸の調査に来ていたことはあまり知られていません。速水はその後、伊藤博文に頼まれ富岡製糸場の場長を歴任し、赤字経営を立て直し、蚕糸法の制定にも関わりました。横浜生糸検査所の開設にも尽力しています。

◆横浜と川越の絹つながり

川越の町のシンボル、「時の鐘」の再建には横浜の生糸商原善

三郎、野沢屋茂木惣兵衛が多額の寄付をしていることは、川越でもあまり知られているとは言えません。横浜歴史資産調査会の米山常務理事には「生糸が作ったまち・横浜」という演題でお話を頂きました。鉄道は現代の私たちが考える以上の存在でした。「金貨」を運ぶ如く「生糸」を運んだのです。田中優子法政大学名誉教授は、「生糸の歴史は日本の



フォーラムのフライヤー



講演の様子



着物姿が鮮やかな講演者たちと米山氏

近代史と重なる。中国から生糸を輸入し続けた日本は、幕末から養蚕の技術を発達させ、明治になり輸出大国となった。その基盤には木綿の国産化の変遷があった」とコメントされました。日本各地には、横浜を目指した「絹のものがたり」が眠っているのではないのでしょうか。今後もそれらとの出会いを楽しみにしています。

八王子から全国の繊維産地へと足を運んで

奥田博伸 (奥田染工場・つくるのいえ)

明治時代に葛飾区立石で曾祖父が捺染業を始め、昭和のはじめに小宮町(現・八王子市中野上町)へと水を求め移転してきました。八王子駅から北西に1km先、川口川と浅川に挟まれたその土地は、市街地を水害から守るための遊水地として機能していました。同時に豊かな湧き水に恵まれ、地面を掘れば容易に井戸ができるような土地でした。昭和初期、川の氾濫が防がれるようになり、市街地から近いその土地には多くの繊維企業が広い土地と水を求め移転してきました。またこの小宮町に生まれた産業から高い税金を得るために昭和16(1941)年、八王子市と小宮町が合併したことが、今の広い八王子市が作られるきっかけとなっていきました。

30年前、自分がまだ子供だった頃、この街はまだそこかしこに繊維企業が残る、繊維の街でした。あれから時がたって、一時期は千とあった企業も数えるほどになりました。20年前、すでに厳しい状況になっていた実家の捺染業の手伝いをはじめ、10年前父が亡くなり会社を引き継ぎ、この10年で残っていた同業者も1件また1件となくなり、とうとう去年、いくつもあった広幅の捺染工場は八王子では弊社だけになりました。

街に工場が減っていく中で10年前から、若いデザイナーと共に全

国の繊維産地を回るようになりました。八王子の産地の内側しか知らなかった自分にとってそれは気づきの連続でした。このままでは継続は難しいと思っていた中で、足を運ぶことでいくつもの視点と仲間に出会うことが出来ました。

地元の活動とは離れていた自分はちょうど5年前、またもう一度、自分が住む街に向き合おうと思うとともに、全国を回った出会いをちゃんと活かしたいと思い、八王子の街に残っていた古い織物工場の家を改装した「つくるのいえ」を始めました。

八王子での活動の第一歩として、また道が街を作っているという視点が、当時まだなかった自分にとって、横浜から八王子まで「シルクロード」と呼ばれる旧道※を、歴史を調べながら歩いたのは忘れられない思い出のひとつです。

「つくるのいえ」では、全国の産地をつなげる活動を行っています。この八王子の街が交流の要衝として栄えた歴史と、そこから生み出されていま失われようとしている繊維の技術、全国とこの街、ものづくりと歴史、それらが交差することで、この地で新しい何かが生み出せるように思います。

また、日本遺産に認定された八王子市では2023年2月18日(土)・19日(日)、全国のものづくりに出会う「道草 旅する布市」(日本遺産「桑都物語」推進協議会主催)が開催されます。ぜひ八王子までお越しいただけたら幸いです。

※横浜―八王子「絹の道」

八王子から鎌水を通して横浜へ至る浜街道と言われた道が、生糸商人や西洋人が行き来後に「絹の道」(シルクロード)と呼ばれるようになった。多摩丘陵に位置する鎌水は幕末から大正にかけて養蚕の盛んな地域だった。集荷した糸を八王子宿で売買する生糸商もいて、彼らは開港後にこの道を歩いて横浜に生糸を運んだ。



2020年 街に残る「のこぎり屋根」を調べてまとめた「のこぎりやね探訪」のWEBサイト



2023年2月18日(土)19日(日)開催「道草 旅する布市」フライヤー



2022年11月に八王子市で開催された、全国産地のプレイヤーが集まる「テキスタイル産地ネットワーク」。今回は福井県で第7回開催予定

シルク博物館と横浜スカーフ

◆歴史的な場所に建つシルクセンター

横浜に残るシルク遺産については、本紙2022年早春号でも特集しましたが、今回は「シルクセンター」とこの建物内にある「シルク博物館」にスポットをあててみました。

シルクセンターは、1959(昭和34)年3月、横浜開港100年記念事業として、国、県、横浜市および関係業界の協力により、貿易・



シルクセンター外観



英一番館跡の碑



復刻版スカーフ

観光の振興、特に生糸および絹製品貿易の振興発展を目的として建設された「シルクセンター国際貿易観光会館」のこと。所在地の山下町1番地は、横浜開港当初に英国商社ジャーディン・マセソン商会(通称・英一番館)があった場所で、海側の角地に「英一番館跡の碑」が建つ。

建物内には、横浜生糸取引所や、シルクホテルという名のホテルも置かれていたが、いずれも現在はなくなっている。

横浜のシルク遺産を考える時、メモリアルな場所に建つシルクセンターだが、建物自体も注目。設計は日本のモダニズム建築の先駆者として著名な坂倉準三で、鉄筋鉄骨コンクリート造9階建て、地下2階。4階までの重厚な建物の上に、塔のような5階から9階がのびていて、この部分が「シルクホテル」だった。

◆シルク博物館

シルクセンター開設時に同時に開設されたのが「シルク博物館」で、幅広い分野のシルク製品と関連資料を収集公開する博物館で、蚕の生態から、シルクと横浜の歴史、絹製品のできるまでの過程、日本の服飾の移り変わりなどの展示を見ることができる。蚕がまゆをつくる様子、まゆから糸をとる作業、生糸を使った織、染など、かつて日本各地でおこなわれていた養蚕、製糸産業の一端を知ることができる。

生糸とともに、横浜から輸出された絹製品に「横浜スカーフ」がある。横浜スカーフの起こりは、は、「手巾(てはば)」とよばれていた羽二重のハンカチで、はじまりについては諸説あるようだが、横浜の絹物商の椎野正兵衛が1873(明治6)年に、オーストラリアのウィーン万博視察団に参加し、ヨーロッパの絹産産を視察。この時に得た知識をもとに製造、輸出をはじめたと言われている。

生地は羽二重は、桐生、のちに福井などから運ばれ、横浜で染め、刺繍、ふちかがりがほどこされハンカチが製造され、輸出品の主力になっていった。この技術が、戦争、大震災などの苦難を経、海外からの受注を受け生産された「横浜スカーフ」へとつながっていき、1965年にはスカーフ類の輸出が史上最高に達している。ブランドものスカーフのほとんどを横浜で製造する時代は過ぎ、現在横浜でスカーフ産業にかかわっている会社は希少。横浜スカーフはシルク博物館売店(12:00~17:00)で購入することができる。

シルクロード・ネットワーク 神戸フォーラム2022 開催のお知らせ

シルクロード・ネットワークのフォーラムが、初めて西日本で開催されます。港町・神戸は、大正12年(1923)の関東大震災後、日本のシルク貿易の拠点となり、生糸検査所をはじめとして、シルク関連遺産が数多く残っています。下記日程にて、見学会、交流会、シンポジウムを予定しています。神戸にはシルク関連以外にも訪れてみたい魅力ある場所がたくさんあります。この機会に神戸を訪ねてみてはいかがでしょうか。

●2月25日(土) 13:00頃 KIITO(生糸検査所として建てられた建物)集合

見学会: KIITO、新港地区市立博物館、旧居留地、神戸港などを予定

交流会: 神戸港クルーズを予定

●2月26日(日) 10:00~15:00予定。KIITO会議室にて
午前/講演会

「神戸絹の道」「油彩画が語る神戸の歴史」「未来を紡ぐカイコ」
午後/事例報告、シンポジウム

◎問合せ・参加申し込みは、

下記メールをお願いします。

主催: 公益社団法人横浜歴史資産調査会

yh-info@yokohama-heritage.or.jp



現在はデザイン・クリエイティブセンター神戸KIITOとして保存活用されている旧神戸生糸検査所の建物

上毛電鉄現役最古の電車乗車と 桐生市内探訪研修会 開催のお知らせ

昭和3年(1928)開業の上毛電鉄大胡駅にある登録有形文化財の駅舎、変電所などを見学し、開業当初から走っている日本の現役最古の電車(デハ101)に乗車して絹織物の町・桐生へ向かい、織物参考館や町並みを見学します。

この研修会はシルクロード・ネットワーク協議会で協働しているNPO法人街・建築・文化再生集団(RAC)が主催、当公益社団が共催する研修会です。

●4月8日(土) 10時 上毛電鉄中央前橋駅集合
15時20分頃 本町1丁目バス停解散(桐生市内)

参加費5,000円、定員30名

※昼食は西桐生駅でいったん解散し各自で。

◎問合せ・参加申し込みは下記メールにお願いします。

NPO法人街・建築・文化再生集団(RAC)

メール: act@npo-rac.org

協力: 公益社団法人横浜歴史資産調査会



登録文化財の大胡駅車庫と日本最古の現役電車デハ101

受付中!

■歴史を生かしたまちづくり相談室

老朽化、修理費、固定資産税、相続税など歴史的建造物に係るご相談を付けています。ご相談は、ヨコハマヘリテイジ事務局まで。

TEL・FAX 045-651-1730

E-MAIL yh-info@yokohama-heritage.or.jp

旧モーガン邸再建のため ご寄付のお願い

再建にあたり当公益社団では、再建委員会(委員長水沼淑子)を設置し、再建計画、事業計画等をまとめ事業を推進中です。再建費用は、(公財)日本ナショナルトラストから引き継いだ火災保険金の一部と皆様のご寄付で賄います。目標額は1億円。現在、全国の皆さまからご寄付を賜りつつあります。引き続き皆様のご寄付を心よりお願いいたします。(常務理事 米山淳一)

個人=5,000円(一口)・団体・企業等=100,000円(一口)

一口から何口でもありがたくお受けいたします。ご寄付頂いたみなさまのお名前は、再建した建物室内に掲示させていただきます。

*当公益社団への寄付は、税法上の優遇措置が適用され、所得税(個人の場合)、法人税(法人の場合)の控除が受けられます。詳しくは事務局からご案内しますので、お問合せ下さい。

振込先: ゆうちょ銀行

口座番号: 00270-4-124271

加入者名: 公益社団法人横浜歴史資産調査会

※恐縮ですが、旧モーガン邸と明記してください

ご寄付をくださったみなさま。ありがとうございます。

(敬称略。単位円。2022年11月1日~2023年1月15日現在)

中川恵理 10,000	多田真太郎 30,000	辻 聡 10,000
鈴木 誠 5,000	渡利典子 5,000	鈴木伸治 5,000
牧島恵理子 5,000	山中チカ 10,000	村上善真 5,000



●市民公開講座開催のお知らせ

『西洋館の魅力〜藤沢を中心として〜』

講師/水沼淑子氏

(関東学院大学名誉教授・公益社団法人横浜歴史資産調査会理事)

日時: 3月11日(土) 15:00~16:00

会場: 俣野別邸居間

参加費: 無料(入館料別途)

定員: 20名(事前申込制)

申込: 電話または直接来館 9:30~16:30

(受付は2月24日(金)から)

主催: 公益財団法人横浜市緑の協会 俣野別邸庭園

企画協力: 公益社団法人横浜歴史資産調査会



水沼淑子氏

■歴史を生かしたまちづくりファンド

歴史的資産の保存活動推進のためにファンドを創設し、みなさまに寄付をお願いしています。寄付は、税法上の優遇措置が受けられます。当公益社団への寄付は、特定公益増進法人として税法上の優遇措置が適用されます。詳しくは事務局でご説明させていただきます。

■『ヨコハマヘリテイジスタイル 2023年早春号』 ■発行/2023年1月31日 公益社団法人横浜歴史資産調査会

■事務局/〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405

TEL・FAX/045-651-1730 E-MAIL/yh-info@yokohama-heritage.or.jp

ホームページ http://www.yokohama-heritage.or.jp/